

# 新しい生活のカタチ

医療法人健生会 介護老人保健施設リハビリタウンくじ

介護福祉士 ○浜坂聡 小田美香 菊池愛 岡本亮

介護支援専門員 島山明美 理学療法士 叶朋洋 看護師 寺内トミ子

## 1. はじめに

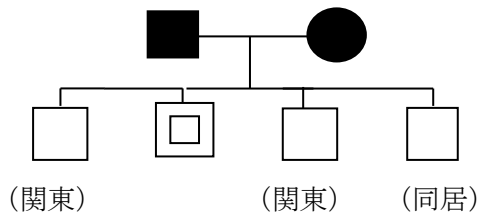
若くして障害を持つことは仕事を失い、今までと違った生活、すなわち施設生活を余儀なくされ、将来への不安、葛藤は相当なものと予想される。「住み慣れた家で過ごしたい。」「自分本来の生活を取り戻したい。」そのような思いに寄り添い、今回、在宅復帰ではない新しい生活のカタチを創出・選択するまでの経過をここに報告する。

## 2. 実施

### 2-1 事例紹介

〈入所当時〉

- ・ N氏 60歳 男性 要介護5 平成24年11月入所。
- ・ 既往歴：脳梗塞（平成24年4月発症） 拡張型心筋症（平成14年発症） C型肝炎（発症年不明）
- ・ 家族構成：



- 婚姻歴無し 脳梗塞発症までは末弟と同居
- 【キーパーソン】長兄（関東に在住）
- 【主介護者】末弟（知的障害あり）

- ・ 入所時：左片麻痺 失語症 構音障害 移動は車椅子自操にて施設内自立 トイレ排泄一部介助（下衣着脱） その他施設内ADLは自立（修正）レベル

### 2-2 経過・取り組み

入所時は在宅復帰を希望され『リハビリをしてトイレに行きたい』『杖歩行ができるようになったら家で生活をしたい』との目標だった。

入所時より精力的にリハビリに取り組み、近接監視下でのT字杖歩行やトイレ動作が可能となった。しかしながら8ヵ月経過時に、後遺症はなかったものの症候性てんかんを発症した。

介護支援専門員より長兄（関東在住）へ近況報告と退所について電話で協議をしたところ、「こんなに早く回復するとは思わなかった。退所の準備が出来ていない。」「このまま施設入所というわけにもいかないの、少し時間はかかるかもしれませんが今後、家に帰れるように考えてみます。」と返答がある。

その後、定期的に現況報告等を重ね、入所から2年経過後、退所に向けた住環境評価と試験外出を目的に本人、介護支援専門員、担当療法士が同行し、退所前訪問をおこなった。具体的な住宅改修の検討と提案、そして主介護者である末弟の介護力等を勘案し、検討を重ねたが結果として在宅復帰は実現しなかった。

退所を模索する中、再び症候性てんかんによる発作があり、「また倒れたら恐ろしい。」と転倒に対する恐怖感

を訴えるようになった。そのため、リハビリを休みがちになり、訓練場面においても長距離の杖歩行が難しくなった。今まで出来ていたことも介護職員に依存するようになり、同時に生活への不満も増していった。

その状況を長兄にも電話で報告すると「本当に申し訳ない。遠くにいるので中々そちらに行くこともできない。弟（末弟）に面倒を見てもらっているのでも弟1人ではどうすることもできない。」と胸の内の不安を明かした。

関東から弟が来設。介護支援専門員が現在の状況と施設内のADLは概ね自立している事を伝え今後の生活について協議したところ「これから冬期間になるので家での生活は心配。」と退所には消極的な様子だった。

そんな折、地域にサービス付高齢者住宅が新たに建設され、入居者を募集しているとの情報を得た。家族に話だけでも聞いてみてはどうかと提案する。「そのような施設があるとは知らなかった。」「どこにあるのか？申し込みしておきたい。」と前向きな返答が聞かれた。

2ヵ月が経過し、弟2人が来設。「入居についての説明を聞いてきた。」とすぐに申し込みをしたいと相談を受け、申し込み手続きを支援した。その1ヵ月後には当該住宅から入居が決定したと通知が届く。

決定通知を家族に連絡し、退所日も決定する一方、N氏は度々「俺をここから追い出したいんだろ。」と不満を漏らすようになった。サービス付高齢者住宅の担当者や家族から説明を受け、また介護職員も新しい生活に対する不安を傾聴するうちにN氏も新しい生活へ前向きとなり、「世話になったな。」と周囲に笑顔で話すなど言動に変化がみられた。平成28年3月、家族に付き添われサービス付高齢者住宅へ入居となる。

### 3. 考察

N氏は常に「家に帰りたい」という気持ちを抱いていたと推察された。家族想いのN氏は車椅子で家に帰っても末弟に迷惑をかけるのではないかと考える一方、施設生活が長期間になるほどここで一生を終えなければならぬのではないかとといった将来への不安も抱きながら日々過ごしていたのではないだろうか。

サービス付高齢者住宅という新しい環境に初めは不信感を口にしていた。しかし、家族や職員から説明を聞くことで、ここなら誰にも迷惑をかけずに安心して暮らすことが出来ると納得し、その結果、新しい環境に前向きな気持ちになれたのではないかと考えられる。

### 4. まとめ

今回の事例は本人の希望である在宅復帰を目指し多職種で支援したものの、種々の理由で自宅への退所は困難となり、自宅に変わる新しいカタチを提案する事で本人の納得する環境への退所に繋がったケースである。

家族も、「いずれここを出て行かなくてはならないが、退所の話を持ち出されると困る」との思いがあり、徐々に面会の足が遠のいたのだと推察された。家族がN氏の退所後の生活をイメージした時、サービス付高齢者住宅が新しい生活の場としてふさわしいと判断した結果、その思いをN氏が感じ取り、受け入れた事で家族の退所への合意が形成された。

後日、新しい生活の様子を見に行く機会があり、今の生活はどうかとN氏に聞くと生き生きとしていて『まだ慣れていないけどいいところだ。』と満足そうに話していたのが印象的だった。

自宅での生活は叶わなかった。しかし、自宅に代わる新しい環境でも自宅に相当する生活ができ、本人の満足出来る生活に導く支援が出来る事をこの事例を通して学ぶことができた。